

報告タイトル

## 20 世紀中国政治空間における知識人

—市民の主体性発見の系譜を探って—

Intellectuals and Their Challenges in 20th Century China

氏名(所属)

呉 茂松(慶應義塾大学)

WU Maosong(Keio University)

要旨(800 字程度)

報告者は、権力の、支配の正統性が国民主権に支えられる政治の実現を政治的近代化とし、その基盤たる近代的市民が如何に生まれるかについて関心を持つ。本研究は、「統治の対象」と「国民主権の主体」というネーションの2つの属性のうち、後者に着目し、その実現条件である公共領域の生成と機能と、それに関わる知識人の言説と役割を、中国政治を舞台に考察する。

まずは、清末から現代までの政治環境の変動を振り返りながら、近代的知識人の生成と存続と、各世代の特徴を紹介し、公共領域の形成と発展における連続と断絶の歴史を整理する。次に、80年代以降、(再)登場する知識人の活動空間と時代的テーマ、各種論争を紹介し、政治社会思潮が多様化した21世紀初頭までの三十年を回顧する。第三に、知識人たちの啓蒙活動に着目し、新文化運動から今日にまで続く、個人の発見、市民の対象性から主体性発見の系譜を見出し、本研究の一つの仮説を提示する。それをもって、「公共性」とりわけ「文芸的公共性」が生まれる余地を探り、支配の正統性が社会から調達される政治的近代化の一つの必要条件を考察する。本研究は、日本近現代史における大正デモクラシー期と、その意義に対する理解を一つの参考軸として、政治的、社会的近代化の視点で、中国の近現代史を理解し、改革開放期を評価することを念頭に置く。

近年、一元化した権力と、多元化した社会の間の構造的な矛盾が懸念され、強まる絶対的な党の領導のもと、拡大する国家機能に吸収されつつある社会に対し、悲観的な見方が広がっている中、本研究は、これまでの中国の経済的近代化がもたらした変化した社会こそが、今後の政治的ダイナミズムを生む源泉であり、支配者が調達すべき新たな正統性根源であることを立論していくことを通じて、中国の社会的近代化における100年の意義を考える。

